

〔書評〕

湯浅彩央著 『近代日本語の当為表現』

鶴橋俊宏

1 はじめに

当為表現の理論的・形態的枠組みは研究者間で一致しているわけではない。したがって、その研究方法も対象も区々である。本書では、研究対象をネバナラヌのような、否定条件を表す前項部と、禁止を表す後項部との二重否定のユニットによって成り立つものと明確に規定し、その生成と選択・定着過程を史的に論じている。

資料として、江戸語に洒落本・滑稽本・人情本および噺本、近世後期上方語と尾張方言に洒落本、東京語・関西語（明治以降の近畿方言）に小説を主たる資料として用い、さらに国定教科書によりそれぞれの単位の定着度合いを検証している。さらに、言語地図（GAJ・NLJなど）を使って言語地理学的な解釈を加えている。

2 本書の構成

本書の章・節の構成は以下のようになっている。紙幅の関係から、第一章から第七章に設けられた「はじめに」「本章のまとめ」、および各節の小見出しは省略した。

序章 研究の視点と方法

第一節 研究の立場と範囲

第二節 考察の手順

第三節 研究史

第一章 江戸語における否定表現・当為表現の又系からナイ系の変遷について

——話者と聞き手の社会的関係・親疎関係——

第一節 変遷の様子

第二節 場面・人間関係による使用状況

第二章 関東地方における当為表現

第一節 前項部の様子（ナケレバ・ナクテハを中心に）

第二節 後項部の様子（ナラナイ・イケナイを中心に）

第三章 近世以降の東西方言における禁止表現の史的研究

——当為表現との関わりから——

第一節 調査資料

第二節 GAJの様子

第三節 文献資料の様子

第四節 当為表現との比較

第四章 近世期尾張地方における当為表現

第四章 近世期尾張地方における当為表現

第一節 調査資料

第二節 当為表現の様子

第三節 禁止表現の様子

第四節 GAJとの比較

第五章 近世期尾張方言資料における当為表現・禁止表現

第一節 先行研究

第二節 ナラン・イカン・アカンの様子

第三節 当為表現・禁止表現の比較——言語地図との対照

第六章 国語教科書における当為表現の変化

——明治から昭和二〇年代にかけて——

第一節 近世後期から明治・大正にかけての様子

第三節 国定国語教科書の様子

第四節 否定助辞の様子

第七章 当為表現の全国分布とその解釈

第一節 GAJの分布とその解釈

第二節 NLJ

第三節 両図の比較・対照

終章 近代日本語研究における中央語と方言

3 各章の概略

まず、各章ごとに概略を記す。

第一章は、近世後期江戸語の否定表現と当為表現とを、否定の助動詞ヌ・ナイの交代をもとに論じたものである。江戸語において否定のヌ・ナイは、東国語系統のナイが、次第にヌを凌駕していくことが知られている。本書では、まずその様相を話者の位相と待遇表現との関わりで説明し、当為表現もこれと連動した形で生成されていくと結論付けられている。すなわち、前項部ネバ・後項部ナラヌなどをヌ系、前項部ナケレバ・後項部ナラナイなどをナイ系とし、当初より前項部と後項部はヌ系・ナイ系がタイアップしており、時代が下るに従いナイ系が主となっていくと述べられる。資料として、先ず洒落本・滑稽本・人情本を用い、それぞれ明和〜寛政、文化文政、天保と時代区分を行い、さらに断本によつて変遷の時代的展開を補強している。

第二章では、関東地方における当為表現を前項部・後項部それ

それについて、文献に徴した江戸語・東京語の史的展開と、言語地図を用いた言語地理学的解釈とを併せて行ったものである。ここでは、前章で行った前項部・後項部の抽出をより精密にし、明治から大正の東京語の実態を加えている。前項部は、ナイケレバ▽ナケレバ、ナイデハ▽ナクテハと変化しナイ系のナケレバ・ナクテハに収斂する様が見られる。

第三章は、上方語・関西語、江戸語・東京語の禁止表現の史的变化を論じている。上方語ナラヌから関西語アカン系、江戸語ナラナイから東京語ではイケナイとなる。アカンは東京語には伝播せず、ダメが登場し東西対立の図式が生まれる。当為表現にはナル系が残存し、イク系（イカナイ・イケナイ）への移行は禁止表現より遅れる。

第四・五章は、洒落本・雑俳を資料に近世後期尾張方言の当為表現・禁止表現の実態を述べたものである。前項部は位相・待遇による使い分けが見られ、上位者から下位者にはニヤ、上位者同士にはナンが使われ、ズバは消えている。後項部は位相にかかわらずナルマイ・ナラズ・ナラン・イカンが用いられている。

禁止表現は当為表現と重なるがイカンに変化していく。ン・ナ、イカンのような新形式の出現は上方よりも早い。第五章はさらに形態をもとに分類を行ったものである。ナラン系は当為表現が多く禁止表現もある。イカン系は「不良」が多く、禁止表現は少ない。アカン系はまだその萌芽が見られるのみである。

後項部に関し、禁止表現にはコトハナナン、テハイイカンの

ように前項部との対応が見られる。さらに言語地図にも言及し、禁止表現で東日本のダメ（後項部）、関西語のタラ（前項部）があり、東西中央語の緩衝地帯の様相を呈すと述べている。

第六章では国定教科書などの国語教科書を資料とし、近世後期の展開が標準語においてどのように収束を迎えるかを述べている。

国定教科書以前は、後項部にベシ系（ベカラズなど）が優勢であるが次第にナル系に転じる。国定教科書においては、前項部にナケレバ、後項部にナラヌ・ナラナイが主である。文学作品に比べて、後項部にナル系が多いのは規範性が重視されたからである。当時ナケレバ・ナクテハナラヌ・ナラナイが代表的、一般的な形だったので教科書にもそれが反映されている。後項部ではヌも少なくないが、前項部ではナイ系が否定助辞よりも先んじて用いられており前項部と後項部で異なった傾向を見せる。また江戸語のズバナナルマイの呼応関係が弛緩しておりズバの衰退が明らかである。

第七章は、言語地図における当為表現とそれに関連する恒常仮定条件と禁止表現の分布を扱ったものである。これは、当為表現の前項部が恒常仮定、後項部が禁止表現で、その結合体としての当為表現と比べることで当為表現の特徴が明らかになるからである。

当為表現の単独形式との違いは、形式が限定されかつ古い分布を示すことである。前項部と恒常仮定は、近畿ン・ナ、関東バと

東西で異なる。ただし、恒常仮定に多用されるタラ・ナラは当為表現には見られない。後項部は周囲分布の様相を呈するが、禁止表現では多様な形式が見られる。

終章では、これまでの研究成果と、文学作品に加えて言語地図や国定教科書を用いることの意義とを再説し、残された課題の見直しおよび今後の方向性を示している。さらに、関東のイケナイが関西からの伝播ではなく独自に形成された可能性があることをここで付け加えている。

4 本書の成果および展望

以上の内容について、若干のコメントを加えつつその意義を述べる。

本書は、既発表論文をもとにしたものであるが、一貫して当為表現の前項部・後項部の諸要素の種類とそれらの結合の実態とを、時代と地域という二つのファクターで説明している。前項部については、従来から注目されてきた江戸語における否定のヌからナイへの交代などで説明し、後項部は江戸でナル系からイク系、上方でナル系からアカンへの変化の様を評述している。また、否定や禁止などの単独表現と、当為表現における条件と禁止とは互いに同期しているわけではなく、その変化は様相を異にする¹と指摘している。課題はその要因を明らかにすることであろう。

現代語の共時的研究で当為表現後項部ナラナイ／イケナイの差異は選択可能性や文体といった基準によって説明されることがある。文体差が生じる理由は既に通時的解釈を提供していると思うが、他について本書の研究結果がどのような評価をもたらし、複合辞の生成のメカニズムにいかなる視座を提供するのか、今後の展開が期待される。

本書の方法論的特徴は、単に一地域の実態、通時相の記述だけではなく、時間的変化と地理的分布を立体的に捉えている点、文献学に加え言語地図を用いた言語地理学的解釈を行っている点にある。さらに、標準語における当為表現の形式の定着ということ²を射程に入れていたため江戸語・東京語のウエイトが大きい³が、江戸・東京と上方・関西の実態と「緩衝地帯」の尾張の使用実態を細かに論じ、それぞれの語形の対比によって各地域の変化と定着の過程を描いている点にも本書の特色がある。それによって、それぞれの変化が伝播によるものか否か、相互にどのような影響関係を持っているかに言及している。

尾張戯作については、師である彦坂佳宣氏の詳細な論考に触発されたものと推察するが、調査結果を受けて洒落本の尾張方言資料としての価値について師説に何を付け加えることができたかも明らかにしてほしいと思う。本書には組み入れられていないが、江戸語受容という観点から尾張洒落本の性格を考察している。資料の評価について一つの新しい試みである⁴。

資料に言語地図を加えたことで、文献だけでは見えにくいある

いは現れてこない事実をあぶり出してしている。イク系が上方から移入されたという従来説に対して控えめながら疑義を呈しているが、これは言語地図の分布からヒントを得たものであろう。実際、江戸洒落本には早くからイク系の例が少数ながら存在する²⁾で、用例の補強によってこれが覆される可能性があると思う。その際、複合辞の研究ではもとの自立語との関係（意味の衰退・分化）が問題となるので、イク、イケル、オエル、ナルといった動詞自体がどのような変化を遂げたかも視野に入れるべきと考える。

文学作品から用例を得る方法は偶然が作用することがある。実際近年の近世語研究を見ても、他資料によって結論が覆される例が見られる。言語地図を用いて、その危うさを理論的に補うことの一つの方法を示していると評価できよう。

文献資料の扱いについて言えば、文学作品から抽出したものを一種の「エクリチュール」として扱っているようである。つまり、江戸資料をジャンルごとに時代的なまとまりとし、断本をそれに並列的に置いている。そのことは評者も賛同するが、同時に個々の作品にさらなる検証を加えることが、資料観や個々の資料が時代言語の記述に有効かを保証する手段になると思う。近年の近世語研究には個々の資料を無批判にあるいは等質的に扱い、得られた用例をそのまま各時代各地域の言語実態とする例が見られる。終章には資料論の重要性について述べられているが、今後の江戸語、上方語、尾張方言の研究にはそれが具体的に実現する

であろう。

複合辞的研究に限らないが、説明の前に各形式の正確な記述が先ず必要であると考えるが、本書もそのような姿勢で進められていると思われる。今後ともその方針を貫き新たな知見を加えていくことを期待する。

評者は近世江戸語の研究を専らとしていたので、興味の対象が偏っていること、言語地理学に暗くこの点での理解が行き届かなかったことをご容赦いただきたい。

注

(1) 地方洒落本のなかの江戸語―尾張洒落本を例に― 湘南文学52 (2017)

尾張洒落本に見る江戸語受容に関する一考察―助詞融合を例に― 言語文化研究17 (2018)

(2) 本書出版の後、滑稽本の追加調査によって、イカナイ・イケナイが江戸語を通じて見られることを明らかにしている。

江戸滑稽本におけるイカナイとイケナイ―当為・禁止表現からの一考察― 第367回日本近代語研究会 (2019年度秋季発表大会) 2019年10月25日

(二〇一九年三月五日 武蔵野書院刊 A5版 一三〇頁 税込価格 九、六八〇円 ISBNコード 978-4-8386-0716-7)

(つるはし・としひろ 静岡県立大学短期大学教授)